

## 意味の理論体系における文法性判断\*

### Grammaticality on a system of construal

宇都宮 裕章

Hiroaki UTSUNOMIYA

（平成 16 年 9 月 27 日受理）

#### 1. はじめに

言語学の下位範疇として音韻論・形態論・語彙論・統語論・語用論といった部門が存在することは、近代言語学開闢以降あまりにも当然のものとして扱われ、区分に対する異論を差し挟む余地がほとんどなかった。現代の膨大な言語学的知見の大半は、部門毎に確立されている方法論に則った議論の集積であり、言語現象を各部門の中で分析してきた研究の成果である。生み出される数々の理論は現象を説明できるという点において妥当なものであり、反例となりうる言語現象が発掘されるまで一定の信頼性が保持される。

一方、昨今の認知に基づく言語理論の進展によって下位部門の中での規則の体系は互いに無関係で閉じた体系に過ぎないという見方が有力になりつつある。レイコフ(Lakoff, 1990)はその論述の中で、他の学問分野（認知科学・発達心理学・人類学・精神物理学・神経生理学等）からの経験的知見によって下位部門を超える一般化が可能であることを予測した。この予測は続く議論の展開の中で立証されていき、認知言語理論という新たな理論の確立に繋がった。そして、各下位部門の中だけで通用する規則が「標準的に安定していると考えられる言語事実の一部を規定するための理論的な道具立て以上の意義は認められない(山梨, 2000: 268)」とまで考えられるようになった。

確かに、各部門内だけで議論することの不適切性は、段階的・連続的分布という言語現象によって顕在化した問題である。しかし、その言語現象自体を立証材料として取り上げるだけでは、下位部門理論を新たな理論で置き換えたに過ぎなくなる。単なる置き換えだけの問題なら、下位部門理論内で説明した方が（例外も多いが決定論的な）予測性と（詳細だという意味での）精確性があるという点で、認知的な説明よりも厳密さに優れていると言えよう。さらには、広く経験的知見という言葉を吟味すれば容易に了解できるように、「音声」「形態素」「語」「文」「談話（文章）」という言語単位を認めるのも私たちの知見として「経験的」なものであることは否定し難い。したがって、真に「道具立て以上の意義」を与えるためには、既存理論で説明しにくい言語現象を取り上げる前に、既存理論の説明道具（下位部門）の存在意義を問い直さなくてはならない<sup>1</sup>。

そこで本稿では次の2つの問題提起を行う。①なぜ下位部門が存在すると認められるのか。②下位部門間にまたがる現象を説明する理論の特徴は何か。これらの問題の解決を通して言語単位横断的な理論体系を提唱し、その下でこれまでの文法性判断がどのように扱えるのかを議論していく。

## 2. 言語原理と構成的言語観

### 2. 1. 言語単位と下位部門

言語単位は経験的なものである。単位の定義以前に私たちが知覚（もしくは理解）できるものだからである。私たちは、「aka」などという音を物理的に連続させながら様々な周波数や強さで発することができるにもかかわらず、これを「あ」「か」というまとまりで分節している（音声）。「あかふ」「くろふ」「しろふ」でなく「あかい」「くろい」「しろい」と言えることから「ーい」という音に一定の役割があることを知っている（形態素）。また、「あかふ」と言われても何のことも理解できないが「あかい」なら分かることから決まった音を連続させるとあるまとまりになることも知っている（語）。さらには、「赤い靴が」は「汚れた」に続けられ「赤い靴を」なら「汚した」に続けられることから「～が」と「～を」の働きを把握している（文）。そして、「お前の赤い靴が汚れているぞ」と言うことで「綺麗にしておけ」という意図を込めることも可能である（談話）。

一見「音韻論」「形態論」「語彙論」「統語論」「語用論」という下位部門は、上述の経験的現象を論理的に定位したものであるように思われるが、それぞれの言語単位を対応する下位部門体系上で議論しなくてはならないとする必然性は全くない。例えば、音声を統語的に論じても文成分を語用的に扱っても高い説明力を持つならば妥当な理論になり得るだろう。言語単位を認識させている経験と方法的経験では経験の質が違う。どちらも経験的知見には違いがないが、後者は人間の事象の捉え方（認知）とは直接結びつかない。

下位部門が理論体系として確立した背景には構成的言語観という根の深い言語観がある。構成的言語観とえば言語記号について二面性を有する心的実在体としたソシュール(1940)の「所記(概念)／能記(表象)」の区分が取り上げられるが、各言語単位と下位部門の結びつきはまさにこの区分に匹敵させてしまった結果である。そして、それらの結びつきを強固にしているのが言語原理として挙げられている「恣意性」「線条性」「不易性・可易性」である<sup>2</sup>。

言語単位を下位部門と恣意的に結びつけることで現象と理論を厳密に分断することが可能になるが、これは理論構築にとっては非常に優れた方法である。なぜなら、言語学は根本的に言語の様相を言語で記述・説明しなくてはならないので一つ間違えると循環論に陥る危険性を常に孕んでいるためである（深谷・田中, 1996: i-iii; 中村, 2004: 176 脚注）。ここで現象とは全く関係のない（恣意的な）説明ツールがあればそのツールで現象を扱うことができる。この点によって物理の様相を数学で記述する自然科学などと同様、言語学が「科学的」になり得たのである。さらに、下位部門におけるそれぞれの理論は時間の中にのみ展開する（換言すれば、時間的秩序が付与される）ために、「ただ一つの次元において測定可能(ソシュール, 1940: 101)」となる。この線条性という性質が明確な予測性を生み、下位部門が理論として説明力を備えるに至った。さらに、所記と能記の恣意的な関係性を維持するという不易性と、所記・能記の関係性がずれることで言語変化（変遷）が起こるといふ可易性は、そのまま理論体系の変遷の様相を示している。そして、この原理が理論の発展性を保証している。すなわち、言語現象のより良い説明をするために、既存の理論を別の理論に置き換えることを可能にしている。

以上のように下位部門は構成的言語観の産物である。しかしながら、興味深いことに同じ言語原理が上述の下位部門とは全く異なる理論体系の根拠にもなり得るのである。その議論を展開することで下位部門の存在意義を問う。

## 2. 2. 意味の理論体系

認知言語論の立場では主観性・感性・身体性が論述の原点となるために、ソシュールが言語の第一原理とした恣意性<sup>3</sup>を否定する（山梨, 2000; 青木, 2002 など）。確かに、擬音語・擬態語・感嘆詞の類やメタファー・メトニミーといった言語表現全てについて概念と表現が有縁的に結びつく説明が可能である。加えて、身体性を基にしたスキーマ群を仮定すると統語的な現象でさえ認知との関係性を明らかにできる(Langacker, 1987 など)。こうして、所記と能記が無縁であって現実に何の自然的契合を持たないという主張は反駁されてしまう。しかし、異なる言語毎にモノの呼び名が異なるという事実、有縁的な擬音語等にしても個別言語によって表現が異なるという事実、「イヌ」という代わりに「バウワウ」が個人の自由意志では使用できないという事実、などを鑑みると人間の概念を表出する手段として「まったく恣意的な記号のほが、他よりすぐれている(ソシュール, 1940: 99)」ことも否定できない。

以上の議論は「恣意性」にまつわる言語の性質についてもっと根源的なものを問う必要があることを示唆している。ソシュール(同著)では「恣意性」という術語を定義する前に所記と能記の2つの辞項の結びつきを言語記号とした。すなわち概念は表現と「結びつかなくてはならない」ものと定義づけたわけである。言語の本質的特徴とされた恣意性は両者の結びつきを前提としている。このことから「恣意性によって結びついている」のではなく「結びつきに恣意性が伴っている」と解釈する方が議論を正しく追っていることになる。したがって、恣意性自体の性質に疑問符が与えられた現在においては、「結びつくこと」そのものに言語原理を置くか、もしくは、結びつきを完全否定するしかない。本稿では、両者の結びつき方はどうであれ、結びつきについては否定できないという立場を取りたい。ゆえに、この関係を「境界性」と言い換えて議論を行うことにする。こうすることで、「恣意性」に伴う「意味なく結びつく」という議論をせずに「言語によって枠（名前・形など）がつけられる」ことに焦点を当てた議論が展開できるであろう。

「線条性」と「不易性・可易性」については、これらを言語原理とすることに異論はない。ただし、後者の術語だとどうしても矛盾点に着目せざるを得なくなるので、これを「可塑性」と換言することにする。言語は変化するものでもあり変化後の状態をある程度維持し体系を形作るものでもあることを勘案し、一度形が変わったら同形に戻ることがないということを含意させることにする。

さて、これら3つの言語原理、すなわち「境界性」「線条性」「可塑性」が下位部門とは異なる理論体系を形作る様相を次に見ていこう。

### 2. 2. 1. 境界性とネットワーク生成

その第一は「記述部門<sup>4</sup>」とでも呼ぶべき言語単位生成部門である。境界性によりあらゆる概念は形となって言語化し全ての形は単位となる（以下、これを前節までの言語単位と区別するために広義に「ユニット」と呼ぶ）。ユニット同士はカテゴリー化という認知プロセスによってネットワークを形成していく<sup>5</sup>。ネットワーク形成のきっかけとなるのがユニットのスケール（大きさ）の類似性である。これが、音声レベルは音声同士、語レベルは語同士、文レベルでは文同士でネットワークが形成される理由でもある(山梨, 2000)。つまり、レベルには相応のスケールというものがあるために、例えば、ミニマルペアは音声レベルに、接頭辞は形態素レベルに、類義語群は語レベルに、動詞の項構造は文レベルに、発話行為は談話レベルにおいて

集合体を構成することになる。しかしその一方で、同じ [ga] という音で構成されるユニットでも A [がーざーだーば...] という音レベルのネットワークの成員になることもあれば、B [蛾一字一図一具...] という語レベルのネットワークの成員になることもできる。これは各ユニットのスケールが相対的なものであることを示す。さらに掘り下げると、ユニットのスケールだけで〇〇レベルという集合体を想定することさえ厳密には不可能であることも示している。すなわち、[ga] というユニットは、C [ga-gaa-gaaa-gaaaa...], D [ga-gá-gà-gâ-gã...], E [がむ・かむーうがつ・うかつーきが・きか...], F [太郎がー太郎をー太郎にー太郎と...], G [～（ところ）がー～（する）とー～（それ）で...] という様々なスケールのリンク（結びつき）を構成することが可能なのである。このような観察から、一定の大きさだと考えられてきた「音声」「形態素」「語」「文」「談話（文章）」という言語単位は、それぞれのスケールのプロトタイプを中心にした単位であるということが出来る<sup>6</sup>。どちらの単位にも属しにくい周縁的なユニットが存在するのも、当該の集合がプロトタイプ効果を示すためだと言える。

ただし、ネットワーク形成過程においてリンクしたユニット同士が一定の集合体を形作る（ユニット同士の関係性を決定づける）ためには、ユニット同士がスケールにおいて類似しているだけでは不十分で、ユニット同士を繋ぎ止める膠がどうしても必要である。これが「意味」である。先に挙げた A～G のネットワークが単にリンクの一部を表しているだけでなく「集合」であると言えるのも、A～G それぞれに何らかの意味が与えられて（意味づけされて）いるためである。例えば、A では「日本語の濁音節」、B では「濁音一字で構成される語」といったようなものである。認知理論では、カテゴリー理論(辻, 2002; 30)が立証しているように、カテゴリーは各ユニットの共通属性で構成されているのではなくプロトタイプのユニットを中心にして一定のスキーマの下に構成されている。このことから、本節での「意味」はスキーマと言い換えることが可能である。ユニットはスキーマの下に集まり集合体を構成している。すなわち、各レベルに与えられる意味に関係のあるユニットだけがそれぞれのレベルの下で分類可能になるのである。

以上のように、記述部門は「音声」「形態素」「語」「文」「談話（文章）」のどの言語単位においても共通する言語単位横断的な部門となる。すなわち、境界性を基礎としてネットワークを形作る部門であると言えよう。

### 2. 2. 2. 線条性と非対称性

第二は「配列部門」である。線条性によってユニットは時間的順序関係で並べられる。前節の記述部門がソシユール理論での連合（パラディグマティックな）関係であるとするれば、この部門は統合（シンタグマティックな）関係であると言える（注2参照）。

（統合）関係である以上ユニット同士は広義のネットワークを形成すると言えなくもないが、前節でのネットワーク形成とはいくつかの点において異なっている。まず、一次元的（線的）な結びつきでしかないという点である（よって、誤解を避けるために本節では「ネットワーク」という語は用いない）。これは線条性という言語原理から導かれる帰結である。次に、リンク形成のきっかけがスケールの類似性ではないことである。これは語を文で修飾する現象のように異なる大きさの言語単位が結びつくことから容易に立証できよう。そして、ユニット同士はプロトタイプやスキーマによって結びついているのではないことが挙げられる。その代わりにリンクが何によって保証されるのかは本節で後述する。

二つ目に挙げたリンクのきっかけであるが、スケールの類似性でないとすれば何がユニット同士を接近させているのであろうか。機能文法論を展開しているハリデー(Halliday, 2003)は統合関係について次のように述べている。

言語という構成体において考慮すべきもう一つの側面は、統合的な組立、つまり相対的に小さなユニットから大きなユニットを構築することである。これは、物質的体系であろうが意味論的体系であろうがあらゆる体系における構成体を形作る上で、最も単純で接近可能な方法である。こうした言語の構成体を形作る原理となっているのが**ランク**の機能である。異なった大きさのユニット（＝異なったランク）は、総体としての言語体系の中で様々な機能を果たす。(ibid.:18-19; 原文は英語、訳出は筆者)

つまりハリデーは、異なったスケールを持つユニットが部分から全体になっていくという過程で統合関係が成り立つという主張をしているのである(ibid.: 19-20 も参照のこと)。ユニットの機能という概念を除けばソシュールも統合関係について同等の主張をしている。

全体は部分によって価値があり、部分もまた全体のうちに位置を占めることによって価値がある。そこに部分たい全体の統合関係が部分どうしのそれとひとしく重要なゆえんがある。これが一般原理であって、さきに p.174 で列挙したすべての型の統合において検証される；要は、かならずより大きな単位がより小さな単位から組成されており、両者が相互連帯の関係にあることである。(ソシュール, 1940: 179、誤字等は原文のまま)

両者の議論に従うとスケールの異なり（部分と全体）が統合関係になっていることが分かる。すなわち、「スケールの異質性」が統合関係の基礎になっているのである。スケールの類似性でユニット同士が接近する連合関係とは対照的になっている点が興味深い。

もちろん、スケールの異質性によって接近するだけではユニット同士はリンクを維持できない。連合関係と同じようにリンクを保証するものがなくてはならない。しかしながら、ユニットが異質性によって接近するということは、プロトタイプやスキーマという認知プロセス自体が生起しないことになる。そもそもユニット間の類似性（もしくは隣接性）に基づかないまとまりにおけるプロトタイプ、スキーマとは何かという問に対する解答は出せそうにない。そこで本稿ではこれらに代わる保証を考察する必要がある。それが、やはり広く「意味」と呼ぶべきものであろう。ただし、この統合関係を維持する「意味」とは前節で換言したスキーマのことではない。非対称性とでも言うべき意味づけである。

スケールの異質性で接近したユニット同士は、互いに対称的ではないという意味づけがなされて（その限りにおいて）リンクを維持する。ここで線条性という言語原理はユニット同士の非対称性に対して制約になることはなく、リンクを強化する方向に働く。なぜなら、前接するユニットは後接するユニットに対して時間的先行性があり、先に存在するというだけで後接のユニットとは価値が異なるからである。逆に言えば、時間的価値において全く同等なユニット同士は決して順番には並べられないのである（これは2つの物質は同時刻に同位置を占めることができないと捉える私たちの経験的知見でもある）。

順序関係による非対称性は派生的に様々な意味を生み出すことになる。中でも最も基本的なものが、非対称ユニットの一方に重要な意味を付与するという補助部／主要部の関係である。日本語の例をいくつか挙げてみよう。[g] という子音と [a] という母音の非対称的リンクにおいて、[a] が主要部の [が] という音節単位ができあがる。[薄手火（うすたび）] という語と [蛾] という語の非対称的リンクにおいて、[蛾] が主要部の [薄手火蛾] という複合語が成立する。[蛾] という語と [が] という格助詞の非対称的リンクにおいては、[が] が主要部の [蛾が] という文成分単位になる。[蛾が部屋に入ってきたので] という文と [網戸を閉めた] という文の非対称的リンクにおいて、後者が主要部となることで [蛾が部屋に入ってきたので 網戸を閉めた] という複文が成立する。このように、異なったスケールのユニットが組み合わさった体系の総体がいわゆる語順である。修飾—被修飾関係、主題—題述関係、補語—述語関係など言語の多彩な非対称性は、語順に対する意味づけである。

日本語の場合一般的に [補助部→主要部] という語順になるが、この語順の拠り所として話者が認識しているのは、[補助部→主要部] という順で並べよという規則ではなくむしろ相対的に重要な意味を表すユニットを後ろに持つてくるという認識である。この意味の重要度を決定する認識には次の2つが考えられる。その一つが①2ユニットから成る合一体に豊かな意味づけができるかどうか、もう一つが②その合一体がより大きなスケールのユニットの要素になる（スケールアップする）潜在力を持つかどうかである。例を挙げてみよう。幼児が [p] 音と [a] 音をリンクする場合、[pa] という合一体と [ap] という合一体のうち前者を発した方が両親をはじめとする周囲の人々の反応回数が多くなるとそれだけで [pa] の価値が高まることになる (①)。さらに前者の方が [パン] [パパ] [パンダ] のようにスケールアップを可能にするユニットであることが経験上理解できる (②)。また、[蛾が] という合一体と [が蛾] という合一体を比較すると前者の方が確実に内容を伝達できる (①) 上に、[蛾が入ってきた] のようにスケールアップが可能である (②)。他のどんな種類のユニットでも同様で、合一体を成す2つのユニットは①と②の認識によってどちらが相対的に重要なユニットであるかが決定されるのである。そして、日本語環境は意味がより重要なユニットを後接させるというものであるために [補助部→主要部] という語順が経験的知見として話者に蓄積されることになる。

異質のスケールを持つユニット同士が上のようにリンクする場合、リンクした合一体は当然スケールが異なる（大きくなる）。そして、境界性によって新たな境界が付加され出来上がった新たな合一体にはその成員であるユニットとは別の意味がつけられる。これがスケールアップなのであるが、スケールアップ＝言語単位の拡大と捉えるのは短絡的である。

- (1) a. [男が][帽子を][かぶっている]。  
b. [帽子を][かぶっている][男]

(1a)では「かぶっている」という語が主要部であるが全体のユニットは文になっている。一方(1b)では「男」という語が主要部で全体のユニットも語（句）である。この観察からも分かるように、スケールが大きくなることは必ずしも言語単位の拡大を引き起こさない。しかし、この観察をもって主要部が言語単位を決定すると捉えることも間違いである。補助部／主要部という関係そのものが「意味」であるという理由が一つと、言語単位が何であるかを決定するのはあくまでも記述部門での意味づけによるからである。(1a)は確かに [女はサングラスをかけ

ている] などというユニットとリンクさせられるという点で文という単位になるかもしれないが、[男がメガネをかけている（こと）] [男がズボンをはいている（こと）] といったユニットと比較すれば動詞句と言っても良い。また、(1b)のユニットを使って「(あれは) 帽子をかぶる男！」と現場指示すれば立派に文となる。つまり、ユニットの言語単位は主要部の働きによって規定されるのではなく、ユニットに対する意味づけによって言語単位の内容が決まってくるのである。そもそも、言語単位はスケールのプロトタイプでありスキーマであった（前節）。したがって、出来上がった新たなユニットの言語単位が定まっているように見えるのは、当該ユニットのスケールに対する意味づけの結果なのである。本節の議論から導かれるように、配列部門もどの言語単位においても共通する言語単位横断的な部門である。

### 2. 2. 3. 可塑性と共起条件・生起制約

最後にもう一つの言語原理に基づく言語単位横断的な部門を議論しなくてはならない。それが、可塑性による「選択部門」である。可塑性によって形が維持されたユニットは、その不易性ゆえに自身とは異なったユニットと一緒に並ぶ可能性を持ち、その可易性ゆえに別のユニットの影響を受けて変化する潜在性を持っている。もし、ここでユニットが可易性を強力に備えあまりにも短期間に変化してしまうものであるとすると、一定の概念を伝達するという言語の機能が果たせなくなってしまうはずである。しかし、実際にはそういう事態は生じていない。またもし、ユニットが不易性を強力に備え絶対に変化しないものであるとすると、ユニット同士の連結・分離が不自由になり形が固定化して言語の生産性がなくなっているはずである。しかし、これも実際には起こっていない。これらのことから、ユニット同士は可塑性の程度によってリンクの結合力を調整できるようになっていると考えられる。

こうした結合力の差もやはりリンクするユニットの「意味」によって発生するものである。例えば、[θ] 音と [a] 音をリンクさせようとする場合、「θ」音は日本語では出現頻度が限りなくゼロに近く日本語音としての価値がほとんどない。よって [θa] という音節は存在しにくい。これに対して、[r] 音とリンクさせようとする場合は使用する機会が「θ」音より多い。この点で [r] と [a] のリンクは保証されている。さらに、[r] 音より [t] 音の方が、他の母音と結びついて多くの音節を生み出すという点で豊かな価値がある。語句のレベルを考察しても同様である。名詞と格助詞のリンクの場合、格助詞としての [が] と [ば] を比較すれば前者の方が圧倒的に豊かな意味が与えられる。そのために [蛾ば] という合一体は [蛾が] という合一体に比べて極端に不自然なものになるのである。ただし、先ほどの「r」音の議論と同様このレベルのリンクについても程度差がある。[蛾] と [ば] のリンクは全く不可能になるのだが、[蛾] と [k'a]（「k'」は「k」の無気音）のリンクにおいては「k'」音が「g」音の異音（だと認知する日本語母語話者が少なくない）であるために [蛾 k'a] という合一体は完全に排除されるまでには至らない。これが、他言語（例えば中国語）話者の発する日本語音でも日本語母語話者が聴解できる一つの理由にもなっている。以上は統合関係におけるリンクの力の問題である。そして、どんな場合にリンクしどんな場合に排除されるのかという一つ一つの事例を体系化したものがいわゆる「共起条件」である。換言すれば、共起条件とは統合関係におけるリンクの結合力である。

一方、連合関係においても結合力（意味）の差によってユニットの生起が決まってくる現象が観察される。例えば、語彙の生起を考察してみよう。

- (2) a. ○まっすぐな物    ○たいらな物    (久島, 2001: 73)  
 b. ×まっすぐな場所   ○たいらな場所   (同著: 73)

一見それぞれの修飾ユニットと被修飾ユニットは意味の豊かさという点においてそれほど違いないようである。そのために統合関係だけを考えると「まっすぐな場所」という合一体が構成できないとする理由が見えにくい。しかし、[( ) - 場所] という合一体の ( ) 部に生起するユニットの集合を考察するとその理由が顕現する。連合関係のリンクという点では「まっすぐな」と「たいらな」の結合力に差がある。言い換えれば、どんな場合にリンクしどんな場合にリンクしないのかという違いが意味の差となって現れている。久島(同著)では、「まっすぐな」「たいらな」という修飾ユニットの上のような関係について、「たいらな」が2次元性(面)を問題にするのに対して「まっすぐな」が1次元性(線)を問題にするという差に還元して議論している。これはつまり、「まっすぐな」と「たいらな」という2つのユニット間には、ある種の物的なスキーマはあるが、ある種の空間的なスキーマはない(次元性において意味の差が生じている)ことを示している。この点において、どちらのスキーマも構築可能な「きれいな-たいらな」間の結合力の方が「まっすぐな-たいらな」間の結合力より強いと言える。もちろん、この結合力には程度差がある<sup>7</sup>。「げっこりな-たいらな」間には共通スキーマを作ることができない。これは「げっこりな」自体に意味が付与できないためである(実際にはどの語ともスキーマを構築できないので結果的に修飾語となることができない)。一方、「直線的な」は「まっすぐな」に比べ「たいらな」との間により多くのスキーマを構成できるために、「直線的な物」「直線的な場所」のように(この現象に限って)「たいらな」と同等の分布を示す。以上のように、連合関係を前提とする生起/非生起の一つ一つの事例を体系化したものがいわゆる「生起制約」である。換言すれば、生起制約とは連合関係におけるリンクの結合力である。

ただし、実際には「共起条件」と「生起制約」の違いはそれほど明確ではない。特に、ユニット同士の結びつきの不自然さの原因は後述するように記述部門や配列部門で付与された意味も合わせた複雑なものである。しかしながら、ここで重要なのはユニット同士の結びつきが「意味」によって保証されているということである。共起条件や生起制約が全ての言語単位に適用できるということを鑑みても、連結の自然さを醸し出す根源が意味に他ならないことは強調しておくべきである。以下に議論した体系を表1としてまとめておく。

表1：言語単位横断的部門とその体系

部門名		記述部門	配列部門	選択部門
言語原理		境界性	線条性	可塑性
ユ ニ ツ ト	生成タイプ	連合体	統合体	連合/統合体
	接近法	スケールの類似性	スケールの異質性	結合力の程度
	基本的意味	ユニット内 (プロトタイプ) (スキーマ)	ユニット順 (非対称性) (補助部・主要部)	ユニット間 (共起条件) (生起制約)
	決定される性質	種類・内容	重要度	出現度

### 3. 数量詞現象における文法性判断

これまでの論考によって下位部門内だけで議論することの危険性が明るみに出た。前述したように下位部門の存在根拠は音声・形態素・語・文・談話（文章）という経験的言語単位であり、これらの単位はスケールのプロトタイプとスキーマである。したがって、言語現象を下位部門に還元するということは現象のスケールを下位部門の典型的なスケールに無理矢理一致させるということを意味する。しかし、言語現象の方は様々な大きさを備えているためにスケールのずれが生じるのは否めない。この時、研究者が取るべき態度は説明ツール（下位部門の理論体系）の方を変えることであって、決して言語現象、特にその解釈、さらに言えば文法性判断、の方に手を加えてはならないはずである。まさに危険性はここに潜んでいる。説明ツールも言語である言語学は、問題となっている現象が現象自体の性質によるのか説明ツールの不備によるのかが非常に判定しにくい。そのために、しばしば研究者の意図に反して言語現象を理論のスケールに合わせてしまう議論が出現することになる。特に、語彙論、統語論、語用論という広範囲な部門に関係が深い数量詞をめぐる言語現象については、この傾向が強くなる。

この問題を解決するには、言語現象そのものに伴う自然さ（不自然さ）、すなわち文法性を生む要因を考察し、確実に定義する必要がある。言うまでもなく文法性が言語現象の論拠として決定的な役割を果たし理論構築の基礎を成すためである。これまで文法性は、部門の枠を越えない限り同じ定義で扱うことが可能だったので、スケールが一定の言語現象については問題にならなかった。たとえ、言語単位横断的な言語現象が発見されても文法性に複数の概念を付加することで対処してきたのである（すなわち、容認性とか適格性といった術語の使用）。しかし、今や横断的言語現象は次々と発掘し続けられている。それに伴い、文法性についても一つの部門内における定義ではもはや扱いきれなくなっている。

そこでまずは、文法性をめぐる矛盾（定義の曖昧さ）が生んだ議論の不備を探ってみよう。そして、意味の理論体系の下でどのように文法性が扱われるかの詳細を述べていく。

#### 3. 1. 数量詞をめぐる循環論

言語現象を理論のスケールに合わせて論じることの不自然さを具体的に観察してみよう。

(3) a. ?釣り橋を 120m 渡る。(加藤, 2003: 445)

b. その橋を 120m 渡ったところで、恐くなって引き返した。(加藤, 2003: 446)

加藤(同著)は、(3a)を「120m の釣り橋を渡る」のような（遊離しない数量詞の）例と対比することで、遊離数量詞は〈動作量〉を表すと規定し、その上で(3a)の非容認性を「渡る」が動作の完了の意味しか持たない（動作量を表示できない）ことに起因させている。ところが、(3b)のように文脈によって「渡る」が動作量を持てば容認されると主張する。一連の議論の展開を追ってみると理解できるように、ここで加藤は重大な間違いを犯してしまっている。「文の不適格性を見れば語の意味が分かる」と言っておきながら「語の意味を見れば文の適格性が説明できる」という循環論に陥ってしまっているのである。これでは、当該言語現象の理由を説明したことになっていない。このために、「渡る」は場合によっては（動作量が表示）可能だが一般に動作量を表示できない動詞である(加藤, 2003: 446; 下線部は筆者が挿入)などという規定をするはめになった。加藤(2003)全体の趣旨は「統語論と語用論を分けて論じるべきである」

というところにあるので、(3a)は統語論で、(3b)は語用論で論じていることと等しい。つまり、遊離数量詞という言語現象を理論の方のスケールに合わせてしまったという典型的な例である。

同じような誤りが三原(1998)の議論の中にも現れている。

(4) a. 子供がおもちゃをもう 2 つ壊した。（同著: 90）

b. \*私は同僚を本気で 2 人疑った。（同著: 91）

まず、これら例を根拠として「壊す」に終了限界の意味があり、「疑う」には明確な限界点が存在しないと規定した上で、遊離数量詞構文が容認されるのは文にアスペクト限定がある場合だと述べる。ところが、同時に次のような例を挙げ、

(5) a. 庭の桜が虫害で 2 本枯れた。（同著: 98）

b. 小包が午前中に 2 つ届いた。（同著: 98）

数量詞がアスペクト限定の機能を果たすとも述べている。つまり議論のはじめから「文に備わる限界性が数量詞の生起に影響する」のか「数量詞の生起が文に限界性を与える」のかの違いが曖昧なのである。その結果、「語彙的アスペクト限定」と「文脈的アスペクト限定」という 2 つの限定概念を設定せざるを得なくなってしまった。これも、数量詞の機能を理論の方のスケールに合わせた例と言える（宇都宮(1999)を参照）。

さらにこの問題は、北原(1999)にも観察できる。

(6) 太郎が皿を 3 枚割った。（同著: 178）

こうした文に生起する数量詞が「限界点までに達成された数量を表している」と解釈されるから、達成量  $Q$  だ(同著: 178)」とする一方で、

(7) 太郎が 2 秒で / \* 2 秒間 皿を 3 枚割った。（同著: 178）

という文を例示しながら達成量  $Q$  と共起できる動詞句は限界的だとする。なるほど数量詞が動詞句の限界性を決定するという一貫性は保たれているであろう。しかし、(6)が主張しているのは「数量詞の性質（すなわち限界量）を決めるのが文や句の解釈である」ということに他ならず、(7)の主張は「文や句の解釈（すなわち限界性）を決めるのが数量詞である」ということに他ならない。このように根本的な方法論が自家撞着であるがゆえに、北原(同著)では数量詞そのもの（特に期間を表した数量詞）を限界性解釈が可能かどうかのテストに使用する誤りが了解されていない。北原の主張に従えば本来は数量詞と共起させた現象を分析してはじめて限界性解釈の有無を言うべきであるのに、共起できるから（共起現象を根拠に）限界性が生じるといふ議論の挿げ替えが起こっているのである。その結果、三原(1998)と同様、限界性の決定に関与しているのが「動詞句」と「文レベルでの限界性決定句」であるという規定になった。つまり、これも言語現象の方に手を加えてしまった例である（宇都宮(2002)を参照）。

しかしながら、三者に観察できた上のような問題は研究者の力量の問題なのではなく、先に

述べたように下位部門内で議論を展開するとき必然的に発生してしまう問題なのである<sup>8</sup>。端的に言えば、文法性判断を数量詞の根拠に使用する一方で、数量詞を文法性判断の根拠に使用するという傾向が強くなるということである。そこで次節では、この問題を回避すべく文法性を意味づけに対する判断と規定して、言語単位横断的部門の下で論じてみよう。

### 3.2. 数量詞と文法性

前節までで議論したようにユニットの意味は3つの側面から捉えることができる。ユニット内の意味、ユニット順の意味、ユニット間の意味である。言い換えれば、記述的意味、配列的意味、選択的意味という3つの意味づけがなされるということでもある。文法性判断をするとはこれらの意味づけの自然さを感じ取るということに等しい。つまり、経験的意味づけからずれているという感覚が不自然さの要因になるということである。

(8) 花子は畳（たたみ）を3畳（じょう）持っている。

これは一般的に自然な文だと判断される。これを(9)のようにすると不自然な文と判断する者が多くなる（以下、程度の差を問わず「?」の記号で当該現象の不自然さを示す）。

(9) ?花子は畳を3 m<sup>2</sup>持っている。

上の文の不自然さに最も大きく影響しているのは、〔3畳－3つ－3枚...〕というネットワークが持つスキーマと、〔3 m<sup>2</sup>－3 cm－3 cc...〕というネットワークが持つスキーマの違いである。「畳」という個的な物体を前者の個体数量詞で数えることは（経験的知見に照らし合わせて）全く自然なのであるが、後者の内容数量詞で数えることは「畳」を流動的な物だと捉えることに等しいために不自然である。もし、仮に(8)が不自然だと感じる話者がいたら、「3畳」を内容数量詞のスキーマ（広さ）で捉えているということになるだろう。この事例を一般化すると、数量詞自体をいくつかのタイプに分けて文法性の根拠をそのタイプ差に起因させるという議論となる。

(10) ?3畳、花子は畳を持っている。

また、(8)の文を(10)のようにするとこれも不自然さが伴ってくる。この不自然さに最も大きく影響しているのが並べ方である。数量詞を文頭に配するという事は数量詞と文を〔補助部→主要部〕という順で並べたことを意味し、言わば2つのユニットを修飾－被修飾の関係にしていることになる。しかし、「3畳」に与えられた意味は事象だけを直接数えるものではなく専ら「畳」という物体を数えるものである。ここにずれが生じているのである。「(過去に)3回、花子は畳を持っている」の場合が自然なのは「3回」が「畳を持つ」という事象を数えられるからなのである。この事例を一般化すると、数量詞の文中の位置によって文法性を説明するという議論となる。

(11) ?花子は畳を3畳運んでいる。

上のように「持つ」を「運ぶ」に入れ替えても不自然になる。この文の不自然さは「3畳」と「運ぶ」の結びつきにある。「持つ」量としての「3畳」は（経験上）あり得ても、「運ぶ」量としての「3畳」は考えにくい。むしろ、回数だとか距離といった数量の方が「運ぶ」量には相応しいと捉える。この事例を一般化すると、数量詞と他のユニットとの共起性に関する議論に発展する。

宇都宮(2001)では、数量詞自体の意味の側面から3種類の機能を、語順の側面から3つの型を、ユニット同士の結びつきの側面から「数量詞」と「数量詞が数える対象」の関係を議論した。すなわち、記述・配列・選択における特徴的な意味づけに焦点を絞って論じたのである。この議論によって先行研究の数量詞をめぐる問題を一本化した（前節の各研究者が取り上げた問題も解決済みなので、詳細は紙幅の都合で割愛する）。

では、前節の「限界性」という性質は数量詞との関連でどのように扱うべきなのであろうか。まず、記述部門で考察をするにあたって前提となるのは、限界性そのものは語でも文でもなく事象（イベント）の意味（スキーマ）だということである(宇都宮, 2002)。したがって、事象というユニット内にどういう意味が与えられるか（どういうスキーマが構築できるか）によって限界性を表したり表さなかったりといった差が生じる。(4a)と(4b)では事象の意味が違う。前者では変化局面が前景化し、後者では持続局面が前景化している。前者の場合、変化局面を参与者「おもちゃ」の数で切り取る（数える）ことが可能である（おもちゃを2つ壊せば事象が終了する）が、後者の場合、持続局面を参与者「同僚」の数で切り取ることは極めて不自然（2人の同僚をいくら疑っても事象に区切りを入れることはできない）である。また、(7)の例「太郎が2秒間皿を3枚割った」もプロファイルシフトで持続局面を前景化できる話者にとっては、不自然にはならないことになる<sup>9</sup>。ともかく、実際に数量詞は事象の生起数（テンス）や事象の大きさ（サイズ＝発現度）を数えることも可能なので、事象の限界性そのものを数量詞が決定するわけではない。決定するのはあくまでスキーマ、すなわち意味づけである。

また、配列部門で限界性を扱うには、事象ユニットと数量詞ユニットの並べ方を問題としなくてはならない。遊離数量詞が文中に配置されるということは、数量詞ユニットは重要度において事象ユニットを上回ることができないことを意味する。したがって、限界性の有無は事象タイプに左右されることが配列部門でも明らかになる。しかしながら、他のユニットを介してしか事象を数えられない数量詞(宇都宮, 2001: ch.4)と直接事象（の一側面であるアスペクト）を数えられる数量詞では同じ補助部としても重要度が異なる。

(12)a. その学生は本を2冊読んでいる。

b. その学生は本を2回読んでいる。

そのために、(12a)では「2冊同時に読み続けている（非限界）」と「2冊読むという行為を完了した（限界）」の両方の解釈が同じように自然であるが、(12b)では「2回読むという行為をし続けている（非限界）」よりも「2回読む行為を完了した（限界）」という解釈が強い。重要度において「2回」は「読む事象」とほぼ対等の関係になれる力があると言えよう。(3b)を自然と感じる話者は、[120m]というユニットが[渡る]とではなく[渡ったところ]と補助部／主要部の関係をなすと想定している。空間（ところ）を長さ（120m）で切り取るのは数量

詞の基本的な用法の一つである。

そして、選択部門での限界性の扱いは、事象ユニットと数量詞ユニット間の関係についての議論となる。次のような文は、一見不自然のように感じられるが、

(13)a. 幼稚園の先生が子供の爪を 3 人切った。（宇都宮, 2001: 196）

b. 医者が患者の目を 30 人調べた。（同著: 196）

数量詞が各事象のサイズの部分を数えているという関係になっていれば自然である。すなわち、(13a)では子供の人数が、(13b)では患者の人数が事象限界の量に等しい（と認知する）場合に限って自然な文となる。このように限界性は数量詞が表すというより、事象の限界量を数量詞が切り取ることで現出する意味である。このように議論すると、(3a)や(4b)の数量詞に「ほど（だけ・分・位・も）」を加えると自然になる理由も説明できる。例えば(3a)で〔120m—ほど〕というユニットにすると〔ほど〕が主要部となるために〔120m〕単独では生じにくい「事象の程度の切り取り」という意味が与えられ、結果的に「渡る」事象のサイズを切り取ることが可能となって自然な文が成立する。

ともかく、限界性に限らず文の意味は文法性判断の拠り所である。そして、文法性判断自体は総体的なものであり、唯一の理由に起因できない。(9)(10)(11)の不自然さも先ほど挙げた理由はあくまでも「主として」の影響である。しかし、注目しておきたいことは数量詞をめぐるどんな文法性に対しても記述・配列・選択の 3つの側面から議論することが可能であるという点である。文法性判断が根本的には意味に対する判断であるということから、これは当然の帰結であると言えよう。

#### 4. おわりに——言語原理そのものの議論の活発化へ

言語現象を下位部門内で議論する利点は精確性と予測性である。しかし、これまで述べてきたように、学際的な閉塞性、理論体系内だけで通用する完結性（閉じた体系）、言語現象と説明理論混交の危険性、言語現象の段階的・連続的分布に対する対応のしにくさ、などによって理論的妥当性を失う欠点がある。こうした欠点を内在するために、様々な言語現象は、それが議論の流れに重要な価値を持つにもかかわらず、例外として扱われるか既存の理論に合わせて歪曲させられることに繋がりやすい。もしここで理論体系の変更が認められなければ、既存の体系内で例外現象を説明することになるが、この説明記述は往々にして体系に追加されるだけのものになりやすい。その結果、特殊な言語現象が発掘されればされるほど説明記述の数が激増し、記述自体がどんどん細かくなっていく。もちろん、昨今の情報処理技術の発達は、説明記述を限りなく精確にすることを論理上可能にしているが、精確さだけで言語の何たるかが理解できるのであろうか。言語現象の数だけ理論が存在するなどという捉え方に向かってしまうことはないのだろうか。

それにもかかわらず今まで下位部門のあり方そのものに対する議論が少なかったのは、理論が理念として、さらには言語そのものの実体として考えられてしまったからであろう。本来、言語理論は言語現象の説明ツールに過ぎないはずであって、簡単に「言語が下位部門に分割されて存在している」と理念化してはいけない。物理現象の一部を完璧に数学で説明できたとしても「全ての物理現象は数学である」などという考え方（物理観）が成立しないのと同様であ

る。言語観を立証するには下位部門そのものに対する議論をしなくてはならないはずである。現象を説明するという研究だけでは「言語現象は下位部門理論で捉えることができる」という所までの主張しかできない。

言語理論が無条件に言語実体となり言語観になってしまうと、その悪影響は言語教育に及ぶ。自転車の乗り方を体得する場合、力学に関する理論によって乗車の様相・発展の方向性・成功を予測できるだろうが、理論そのものを与えても乗れるようになるわけではない。同じように、言語を学習する場合も言語理論は学習の様相・発展の方向性・成功を予測できるだろうが、理論そのものを与えても、たとえ直接与えず暗示によるものであったとしても、言葉を使えるようになるわけではない。それにもかかわらず、理論を与えることが言語教育であるという考え方が未だに流布している。それは理論（例えば説明文法）が言語実体であると信じられているからである。端的に換言すれば、文法を教えなければ話せるようにならないという考えである。これは言語理論が容易に言語そのものとして捉えられてしまう傾向の副作用なのである。説明理論が真に言語実体なのかどうかは、言語現象の説明を試みるという研究方法の外で立証していく必要がある。

## 注

- \* 本稿で使用する「意味(づけ)」の概念は、深谷・田中(1996)の「記憶の関連配置」としての意味(づけ)の捉え方と基本的に異なるところはなく、言語観も同意できる。ただし、同著では意味づけによる言語規範の形成についての議論が弱く、下位部門の在り方は先行研究での論述を踏襲しているに過ぎない(同著: 89-93; 314-315)。本稿では、下位部門の存在根拠を探りながら、規範と意味との関連性を議論することで同著の主張を支持していく。尚、英訳表題中の「construal」は、「sense-making(同著: 60-61)」を含意する語として採用した。
- 1. 認知言語論は、「人間の認知一般が言語（の共通性や連続性）をいかに動機づけているか」を広範囲な言語現象から吟味しようとしている。しかし、個々の言語現象の考察になると下位部門体系の存在が暗黙の制約となって浮上する。ここにどうしても「理論の置き換え」のイメージを払拭できない原因がある。
- 2. ソシュールが言語原理を盾に下位部門の区分をしているのではない。むしろ下位部門間には境界線が引けないという主張をし、統合（シンタグマティックな）関係と連合（パラダイグマティックな）関係の区分のみが文法体系の基礎を成すと述べている(ソシュール, 1940: 189)。
- 3. ただし、ソシュールはあらゆる場合に恣意性を主張しているわけではなく、恣意性の制限という観点から「相対的恣意性」という術語を設けている。特に、英語の複数形(-s)などの例を取り上げ高度に文法的な（恐らく、中国語のような孤立語と対立するものという意味で **grammatical** という術語を用いていると思われるが）言語については、ある程度の有縁性を（文法体系に）認めている。ソシュールは意図していなかったであろうが、文法体系に有縁性を認める立場は認知言語論の先駆けと言える。
- 4. 以下部門名で採用した「記述」「配列」「選択」の用語はモーハン(Mohan, 1986)を参考にしている。これに関する議論の詳細は宇都宮(2005)を参照。
- 5. これまでのところ、「事例化」「抽出」「拡張」というプロセスでネットワークが形成されていくことが明らかになっているが(Langacker, 1993 など)、事例化や抽出のきっかけは何か

ということは明確になっていない。それが認知機構であるという議論以上には深まっていないために、階層構造を成さない集まりというネットワークの動機づけができていない。しかし、実際には集まりの中での単位同士を比較することによりはじめてスキーマなりプロトタイプなりが認知されるのであって、ユニットが存在しないうちからスキーマなどが構築できるはずはない。もしできるとしたら、それは先験的なものと言わざるを得なくなり認知言語論のスタンスと大きくずれてくることになる。

6. ただし、あるユニットは言語単位が異なると振舞い方を全く異にするようにしか見えない、としてこの考えを否定する議論もありうる。換言すれば、各言語単位の間には失われた結び目 (missing link) があり、これを説明しない限り言語単位がスケールのプロトタイプであるとは言い切れないという反論である。しかし、既存の理論自体が各言語単位に典型的な現象を中心として確立されたものであり、理論を構築する際に「明確に区分可能な単位が言語に存在する」という命題を前提としてしまっている。本稿ではこの命題を言語原理と考えてはいない。したがって、言語単位が異なることで生じる規模の効果(吉村, 2003: 116)は、理論の不連続性による見掛け上の効果に過ぎないと主張する(プロトタイプ成員同士を異なったカテゴリー間で比較すれば当然不連続性が際立つが、異なったカテゴリー同士は周縁的な成員や共通スキーマを介して連続性を示している)。もちろん、では、なぜ人間は言語単位を認知する(できる)のかという疑問に答える必要はある。恐らくその答えが言語単位の動機づけになることは間違いない。吉村が挙げている低可変性・低生産性・低構成性(同著: 114)は言語単位を分断する性質としてではなく、まさに「高低」という程度問題に還元すべき性質として考察する必要がある。
7. このことは、「まっすぐな」が二次元としての「場所」を修飾できない、とする規定では強すぎるということを示唆する。実際、「まっすぐな場所」についてはいくつかの使用例に出会うことがある(ウェブ検索 <http://www.yahoo.co.jp/> (2004年8月12日現在)において、「真っ直ぐな場所」9件、「まっすぐな場所」13件、「真っすぐな場所」1件)。これらを分析すると、「道路」のような(線に近いと認知できる)場所であれば面性を備えていても使用することが可能であることが分かる。つまり、上のような規定はあくまで「まっすぐな」の中心的・典型的意味(プロトタイプ)を考慮した結果であるから、その部分だけを分析する限りにおいては説明記述が妥当性を持つ。
8. 李(2004: 214-221)で批判されている語彙意味論における循環論も、煎じ詰めればスケールの問題である。語彙のタイプ分けを語彙の意味で行った結果、構文効果と矛盾してしまう現象が説明できなくなるというものである。李はこの観察を根拠に構文的アプローチの妥当性を謳うが、当該構文論が還元主義であろうとなかろうと、構文の意味そのものをどのように規定するかということが(語彙意味論において語彙の意味をどのように規定するかという問題と同じように)やはり問題になる。ある構文が、例えば、「結果構文」であることを語彙の意味を参照せずにどう判別するのだろうか。確かに結果構文は同著で描かれているようなスーパースキーマを持つかもしれない。しかし、そのスキーマの決定に語彙の意味が関与するならば、構文論を語彙意味論から自律させることこそ深刻な矛盾を孕む。構文の意味を動詞の意味で規定している部分(同著: 240)はこのことを象徴的に示している。また、構文のタイプ分けを構文の意味で行った結果、文脈効果と矛盾する現象が説明できなくなる可能性はかなり高まる。これらの問題を回避するためには、あるレベル(言語単

位) が一定の意味を「持つ」と主張してはならない。

9. 皿の早洗い選手権といった場面を想定し、審判が「太郎選手は私の計測器によると、午後 12 時 6 分 25 秒から 27 秒の 2 秒間皿を 3 枚割った（ことになっている）」などと言うことは可能であろう。もちろん、こうした事態は経験的知見として蓄積されるほど多く生起するものではなく、結果的に「割る」事象のプロトタイプとはならない。しかし、この文を自然だと感じる話者にとっては「3 枚」は割る回数を数え、「2 秒間」は持続局面を数えて（切り取って）いるという認識をしていることになり、イベント・スキーマを構築できる限りにおいて意味のずれは生じていない。

## 引用文献

- 青木克仁 (2002). 『認知意味論の哲学—コミュニケーションの身体的基礎』 大学教育出版.
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996). 『コトバの〈意味づけ論〉—日常言語の生の営み』 紀伊國屋書店.
- Halliday, M. A. K. (2003). *On Language and Linguistics*. New York: Continuum.
- 景山太郎 (1993). 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 加藤重広 (2003). 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房.
- 金田一春彦, 林大, 柴田武 (1988). 『日本語百科大事典』 大修館書店.
- 北原博雄 (1999). 「日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞の  
アスペクト論」『ことばの核と周縁』 くろしお出版.
- 久島茂 (2001). 『〈物〉と〈場所〉の対立—知覚語彙の意味体系』 くろしお出版.
- Lakoff, G. (1990). The invariance hypothesis: Is abstract reason on image-schemas?  
*Cognitive Linguistics*, 1-1, 39-74. Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar: Vol. 1 Theoretical Prerequisites*.  
Stanford, CA: Stanford University Press.
- 李在鎬 (2004). 「認知事象の複合的制約に基づく結果構文再考—構文現象の体系的記述を目指  
して—」『認知言語学論考』 3, 183-262. ひつじ書房.
- 三原健一 (1998). 「数量詞連結構文と「結果」の含意【上】【中】【下】」『月刊言語』 27-6, 87-95;  
27-7, 94-102; 27-8, 104-113. 大修館書店.
- Mohan, B. (1986). *Language and Content*. Addison-Wesley Publishing Company.
- 中村芳久 (2004). 『認知文法論Ⅱ』 大修館書店.
- ソシュール, F. (1940). 『一般言語学講義』 (小林英夫訳) 岩波書店.
- 辻幸夫 (編) (2002). 『認知言語学キーワード事典』 研究社.
- 宇都宮裕章 (1999). 「数量詞のアスペクト限定詞用法」『Ars Linguistica』 6, 59-80. 中部言  
語学会.
- 宇都宮裕章 (2001). 『数えることば—数えることをめぐる認識と日本語』 日本図書刊行会.
- 宇都宮裕章 (2002). 「イベント・イメージスキーマによる言語への拡張」『静岡大学教育学部研  
究報告 (人文・社会科学篇)』 52, 1-17.
- 宇都宮裕章 (2005). 「螺旋的言語能力発達モデル—理論化への試み」『静岡大学教育学部研究  
報告 (教科教育学篇)』 36, 11-25.
- 山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』 くろしお出版.
- 吉村公宏 (編) (2003). 『認知音韻・形態論』 大修館書店.